草花育種を目指して

伊　藤　秋　夫

私は高校時代から花が好きで、何か花を研究する仕事に就きたいと思い、昭和27年、千葉大園芸学部を目指しました。上京して神田の古本屋で「実験園のバーバンク」という本を見つけ、バーバンクの多彩な品種改良の仕事を読んですっかり魅了され、将来は花の品種改良をやりたいと思うようになりました。あこがれて入学した千葉大でしたが、当時の花卉研は私には期待外れでろくに勉強もせず、卒業時期を迎えてしまいました。

職もなく、何気なく受けた東大農学部大学院に受かり、育種の研究室に入りました。何しろ花卉研ではゼミをやった記憶もない、のんびりムードで過ごしていたので、さすがに東大はきびきびとした研究、勉学のムードで身が引き締まる思いでした。月１度の大学院のゼミはそうそうたる教授陣に囲まれ、それは命の縮む思いでした。当然育種対象は稲です。研究室内では、バークメソッド（集団育種）、ペデイグリーメソッド（系統育種）の優劣などが論議され、バーク？ペデイグリー？いったいこれは何のことだと大きなカルチュアーショックに襲われながら必死に稲育種を勉強しました。東大の研究室といえば、何か権威に胡坐をかいたような敷居の高い雰囲気を想像していたのですが、意外と研究室の雰囲気は非常に明るく、開放的で他の研究室にも気軽に出入りでき、特に助手の方々とは常に議論したり意見交換したりと自然にやる気が出て、勉学にも楽しさが生まれ、努力するようになりました。この時学んだ稲を対象とした自殖性作物の育種法と、一方当時静岡農試の篠原捨喜氏が庄内白菜選抜育種で提唱されていた母系淘汰法、この自殖性植物と他殖性植物による手法の大きな違いが大変興味深く、これらの認識がその後の草花育種の現場で大変役に立ちました。

模索の時代

２カ年の大学院（修士）の期間は終えたものの、国家公務員試験にはまたも滑り、地方公務員として静岡県遠州園芸分場に就職、配属となりました遠州地方は気候が温和でマスクメロンをはじめ施設園芸の盛んなところ。この分場はこれら園芸作物の試験を意図して、この年完成したばかりのこじんまりした試験場でした。ただ花の研究はやる予定なく、残念でした。温室メロンやトマトの研究はそれなりに面白く、糖度調査のマスクメロンを毎年たらふく食べ、楽しいものでした。

もう一つ、この地域は繊維原料のへちまの生産が特産としてあり、へちまの育種も私が引き継ぐことになりました。ここで３年半ほど勤めたころ、大学院でお世話になった先生から東大の付属農場の助手に来てくれと誘われ、東京の東大田無農場に移りました。遠州園芸分場では成果というほどのものは残せませんでしたが、へちまの試験系統の中に大変豊産で繊維質もよい系統が見つかり、これに「秋葉」と名付け、私の転出直前に発表しました。あとで聞いた話ですが、「秋葉」は産地で豊産多収と好評でたちまち従来品種を駆逐し主力品種になったとのことです。ただ残念なことはへちまの生産自身が需要の減少で衰退し、数年を経ずして産地は消滅してしまったとのことです。

東大農場には50坪ほどの花用ガラス室とビニールハウスでシクラメンその他鉢物をつくったりしていましたが、本来が学生の実習の場を提供するところで、本格的な育種研究などは出来ませんでした。ただ、各種草花の栽培体験は十分に出来、結構その後の仕事の役に立ちました。

やっとの念願、草花育種を目指して

東大農場で５年ほど過ごしたころ千葉大の横井助手

からタキイ種苗で、花の育種スタッフを探しているがお前どうだとの電話があり、本来の自分の目的でもあり、思い切って行くこととしました。ただ私は学生時代から体重48キロとやせて体力もなく、この体でハードな仕事で名高いタキイで耐えられるかなとの不安はありました。当時タキイは京都の長岡研究農場を滋賀県甲西町に移転させる大工事が進められており、花卉科が野菜より1年早く、私の入社した1967年にまだ建設途上の新農場に移転することになりました。出来立ての新農場は大きな石がごろごろした、排水の悪い開墾土。それから10年ほどは植え付け前の整地毎に頭ほどもある大量の石出しに散々苦労させられました。体力は何とか耐えることができました。

入社3年目には私も花育種の大きな部分をまかされることとなり、千葉大の大先輩である治田辰夫場長からは「ＡＡＳに入賞して世界に通用する品種を作れ！」と強力にハッパをかけられ、不安ながら嬉しくもありました。ハボタン、キンギョソウなどは別の担当者が続けており、私はそれ以外のパンジー、ストックなどの育成を、本社に移った前任者から引き継ぐことになりました。今後の花壇苗草花育成目標としてはナーセリーでの大量の一貫生産の時代を考え、形質の揃ったF_1品種を狙うこととし、これからの品目としては当時華々しいF_1品種の育成が続いていたジニア、マリゴールド、それにダイアンサスも加えました。育種は年月を要する仕事ですが私は入社の時期が遅く、それだけ在職期間が短いわけで人一倍仕事を急ぐ気持ちが強かったようで、世代促進など育種年限の短縮にはできる限り努力しました。また使える施設面積も限られていたので、狭い面積でいかに効率を上げるかと、小さな鉢植えにして密植したりと栽培にもいろいろ工夫しました。

パンジーのインペリアルブルーがタキイで初めてのＡＡＳ入賞品種として発売された翌年の1974年、私は海外研修の機会を与えられ、アメリカの育種農場での研修や欧米の大学、研究所，種苗会社、園芸植物園などを5カ月ほどの期間をかけ体験、視察をすることが出来、これはその後の自分の仕事に計り知れない有益な体験になりました。何十町歩に及ぶカリフォルニアのジニア、マリゴールドのF_1採種圃場には唖然とさせられました。これに対抗して日本で如何にしてこれら草花のF_1を採種、販売できるかと頭を抱えたものです。育成年限の短縮努力は一応の功を奏して品種育成も進み、パンジー以降5年連続のＡＡＳ入賞（内定）を果たすことが出来ました。毎年1品種はＡＡＳかＦＳ（フロロセレクト）にエントリーできるようにとの15年ほど先までの育成計画を立てましたが、さすがこれは達成出来ませんでした。ただ出品した品種の入賞率は非常に高かったと思います（主な育成品種は花葉28参照）。タキイは花では後発の会社、そこで生産者の目を引く特徴ある品種の育成にも努めました。種子色選別でオールダブルとなるストックのホワイトワンダー、葉型選別でダブルとなる低温のいらない矮性のピグミードワーフ、種子系では初めてのラナンキュラスのポットドワーフ、低温のいらない極早生矮性のケイランサスのベガなどです。

オランダ、ＦＳの審査圃場

ジニアの無弁型雄性不燃（左）と正常花（右）

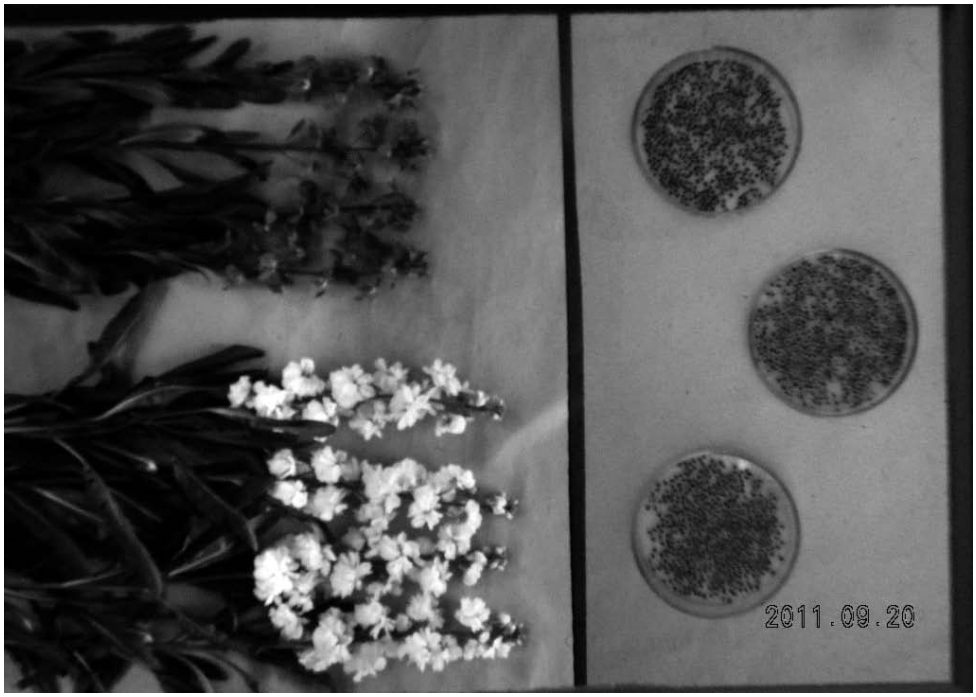
仕事を振り返って

職務育種はアイデアとスピードの勝負だと思います。育種品目には競争品目、開発品目、それに偶発品目といえるものがあります。競争品目とは各社が育種を競っている、マーケットの大きな主要品目のことで、育種目標は各社似たものに成らざるを得ず、競争熾烈な中でより早く開発を進めるスピードが要となります。ただ、これまでに無い変わった形質をアイデアで生かすことが出来れば他社より有利な品種が出来るでしょう。世紀の銘品種、ジニアのピーターパン（ＡＡＳ金賞）に対抗したドリームランド、パンジーのインペリアル系の各種新花色や、ジニアで初めてのダリヤ咲きF_1サン系などです。マリゴールドは撤退を余儀なくされ、競争に負けた例です。

開発品目とはこれまであまり関心を持たれていない草花や形質のなかに隠れた価値を見出し、目新しい品種を開発することです。それだけにリスクも伴いますが、うまくいくと特異な品種が出来て販売にも有利となります。育種の醍醐味です。先述の特徴ある品群がこれになります。更に、資源探索での採集品もこの類に入るでしょうか。ウルグアイの山中で見つけたニーレンベルギアは殆ど育成の手間をかけず、モンテブランコの名でＡＡＳ、ＦＳの両賞を獲得しました。

もうひとつ実際の育種に携わって面白いのは偶発品目です。草花の育成途中には突然変異や形質の分離などで特異な形質が出てくることがあり、これら形質は目的外として見落としがちですが、すかさず有用性を見出し育成開発に採り上げるアイデア心を生かせば、飛び抜けた品種が生まれる可能性と面白さがあります。まさに瓢箪から駒です。先述したストックの連鎖利用によるオールダブルのホワイトワンダー、それに虫が勝手に交雑した種間雑種から見出したナデシコのテルスターなどがこの例です。

企業の景気が悪くなると開発品目には圧力がかかり、マーケットの確実な競争品目に絞られがちになるわけ



ストック　ホワイトワンダー　黒種を選ぶと紫一重（左）、茶種を選ぶと白八重（右）が咲く

キナバル山登山途中で見た巨大なウツボカズラ

で、担当者にとってはつらいところです。幸い私が仕事をしていた時代は会社も比較的順調で、仕事はやり易かったといえます。私は入社が遅く、在職期間が33年と短かったことが残念です。この間育種に専念できた期間は20年程！！　あと10年専念出来れば、倍ほどの仕事は出来たのにと、今思うと残念な気もします。

後半は会議その他管理職的な雑用？が増え、主要育種品目は若い社員に引き継がざるを得ませんでした。会社組織の中では仕方のないことでしょうかね。全く育種から離れるのも寂しいので、手のかからない固定種目的のマイナー品目に目を向けました。この時期に創ったものとしては、パルドーサムのスノーランド、ジニア･リネアリスのプチランド、ケイランサスのベガ，リナリヤのグッピーなどがあります。

退職後、いったい在職中どれほどの品種を創ったのかと数えてみると、なんと150を超える品種になりました。当時はタキイ独自品種といったものが殆ど無かったので、急ぎ品揃えの必要もあったのです。何とかものに成ったのはこのうち半分程度でしょうか。これら以外にも育成途中で見通しつかず断念した品目がかなりあります。育種には無駄もつきものです。ただどの辺で見切り判断を付けるかは大切だと思います。

退職後は別の世界で

最後の仕事として1992年、長野県富士見町での高冷地農場建設に単身赴任しましたが、自然豊かな八ヶ岳裾野のこの地がすっかり気に入り、退職が近いこともあり、標高1000 mのこの地に住み着きました。おかげで近年の夏、都会地が記録的な暑さで悲鳴を上げているのにエアコンなしで快適な暮らしを楽しんでいます。冬は寒いですが最近の家は断熱がしっかりできているので、夜間戸外がマイナス10度以下に下がっても、暖房を切った部屋の出窓に置いた洋蘭が元気に咲き続けてくれます。

2000年に退職しました。在職中にカリフォルニアのサンタローザにあるといわれるバーバンク記念館を訪れることが出来なかったのは誠に残念です。育種もいいですが退職後は別の趣味を生かしてみたいと考えていたので、退職はむしろ待ち遠しく、迷いはありませんでした。山歩き、絵画、百姓、木工や彫刻、クラフトつくりなど脳を活性化させ、ボケ防止対策も含め楽しんでいます。とくにクラフトで開発した「ヤジロッチ」はヤジロベーの原理を応用した昆虫や小鳥の面白いオーナメントで、近くのクラフトフェアーに参加したり、昆虫博物館から呼ばれて工作教室で作らしたりと、子供たちに大人気です。

数年前腰痛を起こし、無理な山歩きは出来なくなりました。2005年にボルネオ、キナバル山（4095 m）に登ったのが本格的登山の最後になりました。今は八ヶ岳山麓の自然保護活動などに参加しています。こんな生きざまでよろしかったら一度お立ち寄りください。

近影